

旗を残した戦前の労働組合

— 三色旗の謎を追う —

谷 合 佳代子

大阪の社会労働運動と政治経済研究班委嘱研究員
大阪産業労働資料館（エル・ライブラリー）館長

◆はじめに

本稿は当館（大阪産業労働資料館、愛称エル・ライブラリー）が所蔵する三色旗が表象するものを探る、「旗を残した戦前の労働組合—三色旗の謎を追う—」という講演の口述記録を大幅に修正したものである。

拙稿は本学の植村邦彦教授の講演「労働運動と謎の三色旗—組合旗の起源と歴史—」の後を受けて行った。いずれも当館の労働組合旗をめぐる物語である。植村教授が写真 1 の「日本労働総連盟映画従業員組合本部」の旗を発端として歴史を遡り、フランス革命に始原を持つ赤旗の歴史を語ったのに対して、筆者はその旗を残した組合がそもそもどういうものであったのかを述べ、さまざまに謎を追いかける過程を紹介した。

写真 1～3 の労働組合旗はいずれも 2009 年頃に、八木鞆子（やぎ・ともこ）さんから寄贈されたものである。八木さんは戦前大阪の労働組合幹部であった八木信一の養女で、父の伝記『八木信一伝』を著している。この旗が当館に寄贈されたとき、なぜこのデザインなのかはまったく不明であった。植村教授が 2013 年頃に初めて当館内でこの旗を見たときに、「これは珍しい。労働組合旗は赤旗だと思っていたが、三色旗もあったのか」と述べたことが、この



写真 1：日本労働総連盟映画従業員組合本部の旗



写真 2：日本労働総連盟の旗



写真 3：純向上会の旗

デザインの謎を解明する大きなヒントになると筆者は感じた。なぜ三色なのか、なぜこの色なのか、真ん中のデザインは何を表象しているのか。

今般、その謎を解くために労働組合の活動記録を探ることとした。このデザインの意味が解明できたところで歴史が変わるわけでも世紀の大発見があるわけでもないが、「歴史の謎を追う」というふるまいは、些細なことに疑問を持つことから始まって、歴史の大きな流れをつかみ、現在へと照射する結果をもたらすものである。資料を探るうちに、「歴史は繰り返しているのではないか。今の大阪の状況と似たことが、80年、90年前にもあったのではないか」ということがだんだんわかってくる。その醍醐味が現物資料のもたらす「力」といえるだろう。

以下は、三色旗の謎を解くべくさまざまな資料やメディアに当たった、その試行錯誤の経過を述べたものである。

(1) 純向上会

写真1の組合旗は1934年末には製作されていることがわかっているが、その元になったデザインは写真2の「日本労働総連盟」旗である（以下、組合名については「総連盟」と略）。総連盟の結成が1931年なので、旗の製作年もその頃と思われる。さらに遡ると、恐らく1923年頃に出来たであろう写真3の三色旗「純向上会」旗にたどり着く。このデザインはいったい何に由来するのだろうか。3旗とも真ん中のデザインが少しずつ異なる。純向上会旗の場合、真ん中に描かれているのは桜の花びらであり、その中に「純」と書かれている。「純向上会」の「純」である。ではその「純向上会」とは何か。

「純向上会」の元の労働組合は1919年11月に発会した「向上会」である。現在の大阪城公園の中にあった陸軍の爆弾や砲弾を作る大規模な工場である「大阪砲兵工廠」の従業員を中心とする組合で、組合員数2000人、これに名古屋砲兵工廠からも250人を加えて2250人で結成された。会長には八木信一が就任した。その向上会が1922年11月に分裂して結成されたのが「純向上会」である。会長には向上会会長を辞任した八木信一が就任した。

名称に「労働組合」が付いていないことから見てもわかるように、向上会は皇室中心主義、労使協調路線を謳った組合であった。穏健な、当時の最右派にあたる組合であり、階級闘争至上主義を批判していた。とは言え、8時間労働制、社会保険制度、退職金の支給など、多くのことを砲兵工廠当局に要求していた組合でもある。砲兵工廠は陸軍が設置しているので、この組合員は公務員で、交渉相手は陸軍である。

八木信一は普通選挙運動に熱心であり、労働者の政党を結成して議会に議員を送りだすことを目標にしていた。しかし当時は、議会主義を軟弱とみなすサンディカリズム思想が労働界の大勢を占めていた。八木の考え方に批判的な左派から、会長であったにもかかわらず八木は向

上会を追放されたのである。

純向上会の機関紙『純向上新聞』の創刊号（1923.1.15）に、組合長の八木信一が「全ては時が解決する」というタイトルで述べていることを読むと、「向上会」への非難と、新聞各紙への批判が連なっている。八木は自らが作った「向上会」を追い出され、自分を追い出した「向上会」を「陰謀派」と呼んだ。こののち、熾烈な争いを展開し、お互いに悪罵の限りを尽くして「純向上会」と「向上会」は対立を続ける。陸軍当局との交渉よりも労組どうしが敵対することに血眼となるような、敵を見誤るようなことが起きていたわけである。

純向上会は「日本労働総連盟」へと改称した後、1936年に再び向上会と合同して「大阪官業労働組合」となった（組合員7000名）。分裂してから36年まで14年間は血みどろの争いをしていたが、戦争の足音が近づいて、労組への弾圧も強くなると、ようやく再統一したのである。

大阪官業労働組合の結成大会で採択された宣言を紹介する。

「近時資本主義経済の破綻と、国際問題の複雑化は労働運動に対しても新しき情勢を展開し、徒に時流におもねり、幻想を追い、日本主義愛国主義の美名を掲げて躁狂する徒輩の簇出するものあり、また焦燥の余り矯激なる方針の下に国家情勢を無視せんとするが如き、共に我等の與せざるところにして、あくまでも明確なる国家観念を把持し官公業の重要性を認識し、国情に即した合理的運動こそ我等官業労働者の採るべき方針なることを確信する」（『大阪社会労働運動史』第2巻1847頁。）

しかし、当時は労働組合法が制定されていないため、法律による保護がない。会社・当局が組合を認めなければ交渉権も存在しない。統一成って結成された大阪官業労働組合だったが、陸軍当局に認められず、結局、このまま活動は停滞し、1939年4月には正式に解散した。

1936年は二・二六事件の起きた年でもあり、事件以後、戒厳令が敷かれている。メーデーも禁止され、労働組合運動がほぼ壊滅に向かう時期であった。その中でも向上会系の組合は最も早い時期に実質解消してしまうのである¹⁾。

（2）日本労働総連盟

純向上会は組織が大きくなり、民間会社の工員も組織して組合員が1万人ぐらいになった1931年5月、「日本労働総連盟」（総連盟）と改称した。元々公務員の組合だったが、大阪砲兵工廠周辺には工廠関連の下請け企業や協力企業が多くあり、そこにも組織化の手を伸ばした結

1) 向上会と純向上会については『大阪社会労働運動史』第1巻、第2巻（大阪社会運動協会、1986年、1989年）、三宅宏司著『大阪砲兵工廠の研究』（思文閣出版、1993年）、『純向上新聞』、総連盟機関紙『日本労働新聞』、大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第2集（1920年版）、第3集（1921年版）、八木鞆子著『八木信一伝』（東方出版、1984年）および同書解説（久保在久著）を参照した。

果、組織が大きくなったわけである。本部は東京ではなく大阪にあり、最後まで関西地方中心の組合であった。組合長は引き続き八木信一が就任した。上述のように1936年に向上会と再合同したのだが、結局認められずに事実上活動できないまま39年の4月には解散してしまう。その翌年には全国の全ての労働組合が解散して産業報国会になるという時代である。

総連盟時代に民間企業で大きな組合組織を作ったのは川北電気製作所という会社においてである。同社は戦前、芝浦製作所（現在の東芝）に並ぶ大きな電機会社だったと言われている²⁾。川北栄夫社長と八木信一はとても仲が良く、労使協調どころか労使が兄弟のようにつきあい、社長の別荘宅に年に何回も

組合長が家族ごと泊りに行くというような労働組合であった。写真4は本部の写真である。「一般労働相談所を開設しました」と書かれた看板が見える。「組合員で無くてもいいです。労働相談を引き受けますよ」という意味である。本部は大阪市北区にあったが、ビルではなく普通の民家を借りていた。ちらりと旗が見えているが、この旗がおそらく総連盟旗であろう³⁾。



写真4：日本労働総連盟本部（『八木信一伝』口絵より転載）

(3) 総連盟映画従業員組合

写真1の美しい旗の作り主が「日本労働総連盟映画従業員組合」である。モノクロ写真なのが残念だが、鮮やかな黒、赤、青の三色がほとんど退色することなく現在まで残っている。

同組合は1933年5月に5支部150名で結成された、映画製作会社ではなく映画館の従業員の組合である。誰が組織化されていたかといえば、もぎりの女性たち、映画技師、弁士などである。この当時、弁士の失業が大きな社会問題になっていた。映画はサイレントからトーキーに移る時代で、弁士が解雇されていく。ゆえに、弁士の争議が頻発していた。また、映画興行が大きな産業になっていき、労働者たちが待遇改善を要求することも増えていく。

2) 川北電機製作所はのちに松下電器と提携し、戦後には松下グループに参入。1962年に松下精工株式会社へ社名変更し、2008年に現在のパナソニック エコシステムズ株式会社となった（『風と空気をつくる：松下精工30年のあゆみ』（松下精工、1986年）および、パナソニック エコシステムズ株式会社WEBサイトより。2015年12月30日最終確認。http://panasonic.co.jp/es/peses/showroom/museum/05.html）

3) 総連盟に関する参考文献は主に以下の通り。

『大阪社会労働運動史』第2巻（大阪社会運動協会、1989年）、総連盟機関紙『日本労働新聞』、八木鞆子著『八木信一伝』（東方出版、1984年）および同書解説（久保在久著）

映画興行は夜遅くまで行われるため、映画館の閉館後に行われる労働組合の集まりも、遅い時刻から始まる。だから懇親会はすぐに酒盛りになり、終わったら夜中の12時半ということも普通にあったようだ。組合の大会や懇親会が深更に及ぶことがたびたびあると、機関紙に書かれている。

組織が拡大していったので、1934年秋には「大阪映画従業員組合」の「大阪」を取って「映画従業員組合」とだけ称するようになった。実はこの「大阪映画従業員組合」という名前の組合がもう1つあった。既述のように、総連盟は右派であり、中間派に「日本労働総連合」という組合があり、その傘下にもやはり「大阪映画従業員組合」が組織されていた。同じ名前の組合が2つあってどっちかわからないという混乱も起きたので、それも原因の1つとして「大阪」という名前を組合名から取ったということである。

ちなみにどの地域の映画館の従業員が組織化されていたかと言えば、玉造、新世界、難波といったあたりである。

この組合旗作製のいきさつについては、映画従業員組合の機関紙『映従ニュース』第8号(1934.10.14)に記載がある。1934年の秋頃から「我々の組合旗を作ろう」という記事が掲載される。

「組合旗の調製に就て」。「メーデー其の他各会合に参加する時には其の必要を痛切に感ずる」。「そこで今度いよいよ拵えることとした。これについて作るのが必然なのだ。贅沢なものは要らぬ。金額は30円程度の予算だ。同志諸君よ、吾が映従のために力を入れて奮発して欲しいものだ。といっても我々はプロだ。一度に出来ないときは二度に分けても結構。目下、旗屋と交渉中であるから近々のうちに細目に拵ったことをお知らせする。同志諸君よろしく頼む」。

文中の「プロ」はプロレタリアの意味である。

映画従業員組合旗は立派なもので、裏表二重になっている。現在ではほとんど見かけない作りだ。「日本労働総連盟映画従業員組合」をそのままローマ字で書いた略字が「NRSREJK」である。30円は果たして高いのか安いのか。組合長である八木信一の月給が70円から80円ぐらいである。この当時、砲兵工廠の男子職員の日当が平均2円ぐらいで、女子はその半分以下だった。週休1日として25日働いたら月給50円になる。平均職員の月給が50円だとして、旗の製作費30円が高いかどうかは微妙なところである。生活レベルが今と全く違うので単純な比較はできない。組合の機関紙には「贅沢は言わん、たかだか30円だ」と書いてある。

真ん中のデザインは、フィルムの中にトーチを持った太い右腕が描かれている。総連盟の機関紙『日本労働新聞』190号(1935.2.15)には「映従新調の組合旗入魂式」という記事がある。

「新春1月8日朝、桜宮神社に於て」。労働組合だが皇室中心主義を掲げていることもあり、頻繁に神社参拝を行っている。八木信一は普通選挙運動に熱心だった人物で、「普通選挙が叶いますように」と組合旗を押し立てて神社参拝に行ったりしていた。

1月8日の様子は以下のように恭しく描かれている。

「早朝より参拝する人の拍手の音もいと神々しく響く中に、新調せる組合旗を先頭に組合長、支部長、各支部代表および理事同伴にて、勇ましくも朝の空気をついて桜宮神社の境内に乗り込んできた。当日はかねて準備しやることとて早朝より清められた神殿の前に張り巡らされる幕の風のはためきさえ爽やかに見ゆるうちに神主の白衣姿現れて、茲に挙式の白文が読み上げられていく。神前へ献帛の儀も終り、お神酒も全員に渡って最後の礼拝を了して挙式を完る。其の頃漸く日は高く、伝説の神木は筋目新しく掃き清められたる庭上に其の影を落として更に一段の清浄を加えたる場所に移りて記念撮影を為して散会した」(原文は旧漢字)⁴⁾

(4) 八木信一

総連盟映画従業員組合のような和風の労働組合がこういうハイカラなデザインの旗を掲げるのはなぜだろう。ヒントは八木信一(写真5)にあるのではないか。

「純向上会」、「総連盟」、「映画従業員組合」、この3つの労働組合に共通する人物は指導者の八木信一である。戦前、大阪の三巨頭と言われた労働組合の幹部がいた。一番有名なのが西尾末広で、次に八木信一、もう1人は坂本孝三郎である。戦後まで活動したのは西尾末広ただ一人なので、今となっては西尾末広の名前しか知られていないのだが、実は八木信一は大人物であった。実際、巨漢である。

ひょっとしたらこの旗のデザインは八木の趣味ではないかと思ひ、娘・鞆子が書いた伝記を読んでみた。以下、主に『八木信一伝』から彼の履歴や人柄を再現してみよう。

八木信一は香川県の琴平出身で、「香川県一のガキ大将」だったと自称している。それでなくても身体が大きいのに柔道を習っていたから、向かうところ敵なしであった。小学生の頃までは全然勉強しなかったけれども、中学生になって突然勉学に目覚め、「勉強して東京帝大に行く」と決めた。その頃、金持ちだった生家が父の死によって傾く。学費が出せないで帝大は諦めた信一少年は、中学を卒業してすぐに家出し、神戸に出奔して港に停泊していた船にこっそり乗り込み石炭室に隠れていた。そのまま寝込んでしまい、目が覚めたらどこか外国に船が着いている。その船はロシア船であり、



写真5：八木信一、1935年
(『八木信一伝』148
頁より転載)

4) 総連盟映画従業員についての参考文献は、『大阪社会労働運動史』第2巻(大阪社会運動協会、1989年)、総連盟機関紙『日本労働新聞』、総連盟映画従業員組合機関紙『映従ニュース』

船長が密航している信一少年を見つけたが、どうやら気に入ってくれたらしくて、追い出されることはなかった。流れ流れて彼はロシアまで行き、何年かたって日本に帰ってきた。

そういう大冒険の後、24歳で大阪に出る。この間に日露戦争があり、彼は二百三高地で死に物狂いの戦いをしてロシア兵を4人殺した。後々このロシア兵に崇られる。24歳で大阪まで流れてきて、ちょうど新入職工と事務職員を募集していた大阪砲兵工廠の試験を受けて入廠。この当時、大阪砲兵工廠はものすごく試験が難しかったそうだが、信一は上手く合格した。ここでメキメキと頭角を現し、30代半ばで既に職場のリーダー格になっていた。

やがて労働組合を結成する1919年を迎える。前年の11月に第一次世界大戦が終わり、戦後不況の時代となった砲兵工廠にも人員削減の嵐が吹き荒れる。待遇が悪化し餓首者も出る時に、八木信一は「向上会」という名前の労働組合を結成することを決意する。11月の結成当初は会長を空席にしたまま年を越し、結局八木信一が会長になる。

向上会は組合運動だけではなく、上述のように普選運動に邁進した。当時は大正デモクラシーの時代である。関西で労働組合としてはほとんど唯一普選運動に一生懸命取り組んでいた。この当時大阪の労働組合は、最初の頃こそ普選運動に邁進するのだが、ほとんどの組合が「そんなものは生ぬるい」と言って止めてしまう。「選挙で世の中が変わるか」「労働組合運動を頑張らって、それで世の中を変えるのだ、労働者の社会を作るのだ」「普通選挙なんかは、おためごかしだ」と、他の組合は普選運動に背を向けた。

しかし八木だけは、自分が公務員だから、交渉相手が陸軍だから、という事情もあったのだろう。「結局国の法律を変えてもらわないことには砲兵工廠の職員の待遇も良くならない」と考え、「ここはやはり自分等の代表を議会に送らないといけないのだ」と言ってずっと普選運動に邁進していた。この頃はサンディカリズム（労働組合主義）が台頭してくる時代であり、八木のような右派の穏健派は生ぬるいと、左派に向上会を追い出されてしまう。

あともう1つの排除理由は八木信一の使い込み疑惑である。八木はものすごく派手にお金を使う。普選運動のために議員を買収したり接待するわけだ。豪遊させて、いろいろなところで接待して派手にお金を使うために、組合費を使い込んだという疑いをかけられるのである。本人は「絶対に違う」と、「それどころか組合費は全然足りないので自腹を切っていたのだ」と言って反論している。事実はどちらかよくわからないが、かなりの金額がこの当時八木信一のもとに大阪の財界から流れているというのは確かなようである。

八木信一とお金に関しては、こんなエピソードがある。彼は1935年の国際労働会議に労働代表の一人として出席している。国際労働会議というのは、ILO（国際労働機関）が年に1回行う総会のことである。労働代表として出席するというのは労働組合の代表として政府の金でスイスのジュネーブまで行くことを意味する。多額の資金を国から支給され、たいていの人にはスイスへ行くまでの間にパリで売春婦を買ったり、あちらこちらで散財して遊ぶらしいのだが、八木は、「一切遊ばなかった、お金はごっそり残した」という。残したお金で4カラットのダイ

ヤを買って帰り、「今まで苦勞を掛けた、すまんのう」と言
って妻に与えた。それはちょっとしたニュースになったら
しい。4カラットのダイヤをヨーロッパで買って帰って来
られるぐらい大金を持っていたというのが驚きである。そ
ういう洋行をしたのが八木信一である。結構ハイカラなも
のが好きだったようであり、三色旗に関しても情報には聡
かったのかもしれない。



写真6：八木信一の帽子。第1回大阪
メーデーを指揮するときに被
っていた。

八木信一が大人物であった証拠に、1921年に行われた大
阪初のメーデーで総指揮者になっている。写真6はエル・ライブラリーに寄贈された八木信一
の帽子で、第1回大阪メーデーの時に八木が被っていたものである。第2回メーデーの時も八
木信一が指揮者になる。

日本で最初のメーデーは1920年に東京でのみ行われた。東京で3000人が集まって行われた
第1回のメーデーが大成功であったと言われている。翌年には大阪や神戸などでも開こうと協
議が行われ、大阪の第1回メーデーは1921年（大正10年）に中之島の剣先公園で挙行された。
中之島に5000人の労働者が集まり、群衆の中に、「巴里は今夜真っ暗け」と書かれた幟が翻っ
ていた。その意味は、「巴里の労働者はストライキでメーデーをやっている。だから今晚、巴里
の街は電気が全部消えて真っ暗け」であるという。

剣先公園は中之島の東端に位置している。何千人もの労働者が剣先公園から天神橋に上がる
階段を昇り、そこから南に向かって松屋町筋を南下する。途中で日本橋の方面へ折れ、堺筋を
南下して解散地点の天王寺公園まで至る。中之島の剣先公園から天王寺公園までだいたい3～
4時間ぐらいかけて練り歩く。天気が悪かったら、喉がカラカラになる。マイクの無い時代だ
から、地声でかなり立てて、「万国の労働者、団結せよ」「8時間労働制を要求するぞ」と叫ん
でいた。だから天王寺公園へ着くころには完全に声が枯れている。そういう時に道端で冷たい
麦茶や水を振る舞ってくれる人達が沿道にぎっしりいたと言われていて、八木信一もその時、
とある人から美味しい砂糖水ももらって生き返る心地であったと、のちに回想している⁵⁾。

(5) 映画「パレードへようこそ」と労働組合旗

労働組合旗について考えつづけていたところ、たまたま関連のある映画作品に遭遇したので、
いま（2015年5月）上映中のイギリス映画「パレードへようこそ」を紹介したい。舞台となっ
たのは1984年から1年間行なわれたイギリスの炭鉱争議である。サッチャー政権の時代にイギ

5) この項については『八木信一伝』のほか、『大阪のメーデー 50』第50回大阪地方メーデー実行委員会編集・
発行 1979.4を参照した。

リスの炭鉱が何十か所も閉鎖されるということが起きた。イギリスの炭鉱は国営で、石炭庁が経営方針として閉山を申し渡したのである。これは日本で言うと同労（国鉄労働組合）潰しと同じで、イギリスの炭労潰しと言えるだろう。1年間、イギリスの炭鉱労働組合はストライキで事を構え、無収入となった労働者たちは生活に困窮した。労働者支援のためにイギリスではいろいろな場所でカンパ活動が行われ、ゲイ・レズビアンの人たちが「サッチャー政権に弾圧されているのは我々も炭鉱労働者も同じだ。連帯するぞ」と言ってカンパを集めて炭鉱労働組合に持って行こうとした、その実話を描いた映画である。素晴らしい作品なので、『毎日新聞』大阪本社版の文化欄に筆者がコメントを寄せた⁶⁾。

セミナーでは予告編を上映し、労働組合旗が登場する場面を聴講者に見てもらった。イギリス炭鉱労働組合の幹部がゲイ・レズビアンの人たちに言うセリフがある。「うちの組合の事務所に100年ぐらい前の旗がある。それは手を握り合っている旗だ。それは団結、連帯が大事だということを象徴する旗なのだ。素晴らしい旗だよ」と。そのセリフが2回出てくるので、筆者は思わず身を乗り出し、旗の登場シーンを待った。ラストシーンに至るまで当該組合旗が登場しなくて失望の念を禁じ得なかったが、最後の最後にその旗が映し出される。これは映画のクライマックスであり、映画史に残る素晴らしいラストシーンであった。

1984年の時点で100年前の労働組合旗だということからは、その旗は1880年頃のものであろう。写真7の全ドイツ労働者協会の旗のデザインとほぼ同じである。東京乗合従業員組合旗もやはり手を結び合うデザインで、これが原点であろう。つまり、全ドイツ労働者協会の赤旗のデザインがイギリスや日本にも渡ったのではないか。

しかし、よくよく見れば、写真2の総連盟旗は手をつなぎあっておらず、手は1本だけである。イギリス炭鉱労働組合の古い旗も日本の総連盟旗とは無縁であることが判明した。ぬか喜びとはこのことで、結局振り出しに戻ってしまったのである⁷⁾。



写真7：全ドイツ労働者協会旗

6) 映画「サンドラの週末」と「パレードへようこそ」を紹介するカラーグラビア記事が掲載され、大道寺峰子記者が次のように記した（『毎日新聞』大阪本社版、2015.5.15夕刊）。

「連帯の素晴らしさを描きつつ、ユーモアあふれる、イギリスらしい作品。ラストシーンは大変力強く、勇気を与えられた」と語るのは、大阪市中央区の「エル・ライブラリー」（大阪産業労働資料館）館長の谷合佳代子さん（57）。「手を結び合うデザインの労組旗や労働歌、女性の地位向上を象徴する『パンとバラ』の歌なども印象的だった」とし、「ストを通じ、女たちが生き生きと、力強く成長する姿もしっかり描かれていて、さすががしい」と付け加える。

7) 映画「パレードへようこそ」については、劇場販売用パンフレットのほかに、早川征一郎著『イギリスの炭

(6) 国際労働者オリンピック

旗の謎は2つある。①何故3色なのか、②真ん中のトーチを持つ右腕は何を表象するのか。さらにそのデザインの由来は何か、を含めれば3つあると言える。

まず、3色の方から解いてみよう。労働組合旗と言えば赤旗が一般的であり、それは共産主義の色である⁸⁾。ほかに、社会思想を反映する色を挙げると、黒は無政府主義（アナキズム）の色、青がリベラル、自由主義の色と考えられる。しかしこの労組の場合、そのような解釈でいいのだろうか。上述のように、八木信一が指導した労働組合は皇室中心主義を掲げる右派組合である。そのような組合がアナキズムや共産主義の色を使うだろうか。

植村邦彦教授が言及したワイマール共和国旗は「黒、赤、金」である⁹⁾。Wikipediaによれば、それぞれの色は「名誉・自由・祖国」を表す、あるいは「勤勉、情熱、名誉」であるといった説が書かれているが、確たる説はないようだ。純向上会旗や総連盟旗が黒、赤、青であることの説明には根拠が薄いと思われる。

次に、真ん中のトーチは今の筆者から見たらオリンピックの聖火にしか見えないのだが、当時の人はどう見たのだろうか。オリンピックに聖火が導入されたのは1928年のアムステルダム大会からである。聖火リレーは1936年のベルリン大会に始まる。ベルリン大会はナチスドイツが国威をかけて行なった大規模なオリンピックであった。

総連盟旗が1931年ごろに作られたとしたら、聖火ランナーからイメージを借りてきたということはあるにない。アムステルダム大会の聖火はただ単に会場で燃やされていただけなので、この大会がヒントになったとは思えない。しかし年代的には近い。

考えあぐねていたところ、つい先日、エル・ライブラリー見学会があり、筆者が「この意味が分からないので、どなたかわかる人があったら教えてください」と見学者に語ったところ、一人の若い研究者が「労働者のオリンピックってあったらしいですよ」と教えてくれた。

そこで次は労働者のオリンピックについて調べてみたが、日本語の文献がほとんど見つからない。1925年にInternational Workers' Olympiadsというのが開かれたということがわかった¹⁰⁾。英語版Wikipediaのページには旗を持つ男性のポスターが掲載されているが、トーチは持

鉾争議』(御茶の水書房、2010年)なども参照した。映画の詳しい紹介は拙ブログ「吟遊旅人ピピのシネマな日々」に掲載している。<http://ginyu.hatenablog.com/entry/2015/05/11/204254>

8) 植村邦彦「社会労働運動の表象：赤旗の歴史」『大阪の都市化・近代化と労働者の権利』関西大学経済・政治研究所、2015年(研究双書第161冊)所収論文を参照。

9) 1813年のナポレオン戦争時にルートヴィヒ・アドルフ・ヴィルヘルム・フォン・リュッツォウが率いたリュッツォウ義勇軍の軍服(黒地に赤の襟、金のボタン)と、リュツォウ義勇軍の志願兵として参戦したイエナー大学の学生が1815年6月に結成したイエナー・ブルシェンシャフトの旗印・制服の色に由来するという(Wikipediaより)。

10) 出典は、https://en.wikipedia.org/wiki/International_Workers%27_Olympiads

https://en.wikipedia.org/wiki/Socialist_Workers%27_Sport_International (2016.1.5最終確認)

っていない。またしても壁に行きあたってしまった。

労働者オリンピックは、「オリンピックはブルジョワジーの大会である」として、これに対抗して、ドイツの社会民主主義者が始めたのが嚆矢と言われている。オリンピックと国際労働者オリンピックの違いはどこにあるのか。

オリンピックはアマチュアの大会である。プロは出場できない。プロでないということは余暇でスポーツを行えるだけの余裕が選手にあるわけで、それが可能なのは労働者ではなく、ブルジョワである。しかも乗馬のような貴族の遊びとされる競技が多い。それに対して労働者オリンピックというのはあくまでも労働者の競技なので、体操、陸上競技、ボートなど、労働そのもの、普段働いている身体を使うという趣旨の競技だった。

1925年、フランクフルトにおいて「ルツェルン・スポーツインターナショナル」(LSI)、後の「社会主義労働者スポーツインターナショナル」(SASI)が、第1回国際労働者オリンピック(オリンピアード)を開催した。SASIは全世界の社会民主主義的、社会主義的労働者スポーツ組織の連合体であったが、ソヴィエト連邦の共産主義スポーツとの共同には反対を表明した¹¹⁾。

1931年には7月19日から26日にかけて、ウィーンにて大規模に開かれた。この時には77,166人の祭典参加者と、20万人の観客があったという¹²⁾。

さて翻って、八木信一がこの労働者オリンピックに興味を持っていたかどうか。新しいもの好きで、大正・昭和初期の時代にフランスからパティムービーという9.5ミリフィルムを上映できる映写機・撮影機を兼ねた機械を購入している。ハイカラな人だけに、ひょっとしたらドイツやヨーロッパの情報には敏感だった可能性がある。

それから、入魂式を行った新調した組合旗については、デザインを組合幹部が審査している。誰がデザインしたのかわからないのだが、組合幹部の審査で決定しているという経緯もあるので、もう少し調べればなにかわかるかもしれない。

筋肉逞しい右腕がトーチを持っているデザインを見て、筆者がオリンピックの聖火を思い浮かべるのは、当時の感覚に照らせば時代錯誤かもしれない。この絵はスポーツとは無縁で、逞しい労働者の腕が松明(たいまつ)を掲げて闘いの象徴としていると解釈するのが妥当なのかもしれない。結局のところ「謎を追う」と言いながら追っただけで解けていないわけである¹³⁾。

11) ミヒャエル・クリューガー著、有賀郁敏訳「ドイツ社会民主党(SPD)150年—社会主義的労働者文化と民衆スポーツ相互間の労働者トゥルネン・スポーツ運動—」『立命館産業社会論集』49巻3号 2013.12

12) 上野卓郎「赤いウィーンの労働者オリンピアード1931年」『一橋大学スポーツ研究』29号 2010.10

13) この項の主な参考文献は以下の通り。

『国旗総覧』(ユネスコ選書)吹浦忠正著 古今書院 1993.11

『世界の軍旗・翼章・国旗図鑑』荏安望編著 彩流社 2007.2

『世界の国旗ビジュアル大事典：第2版』吹浦忠正著 学研教育出版 2013.5

『近代ヨーロッパの探究 8 スポーツ』望田幸男監修 ミネルヴァ書房 2002.5

(7) まとめにかえて

三色旗の謎を追ううちに、筆者が「歴史は繰り返している」と感じたことはなにか。それは八木信一というカリスマ的な指導者に今の大阪が重なって見えた、ということである。八木信一は身体が大きく、声も大きい、腕力も強い。橋下大阪市長と似て、何でも「スピード感」を重視する。どんどんがむしゃらに進み、その性格はワンマンである。自分の言うことを聞かない人間には怒鳴り散らして排斥する。その代わり、いったん可愛がったらとことん可愛がる、典型的な親分肌の人だったらしい。そういう人物が大阪の労働運動を指導した。しかし、それに対してやはり反発する若者たちがいて、影響力がだんだん無くなっていくというのが1930年代後半以降のことである。やはり独善的なワンマン運営はよくないだろうと感じた。

と同時に、八木信一は日露戦争に従軍しており、戦場での過酷な体験ゆえに戦争に反対していた。けれども、実際には労働組合は1930年代後半以降、まったく戦争に反対することができなくなり、気が付けば戦争は泥沼に入っていた。労働組合も1940年には結社禁止となり、産業報国会へと再編される。そういう時代に走っていたのである。そのことに気づかずに内部対立や内部分裂を繰り返してきていた。私達が歴史の教訓としなければならないことではないだろうか。

今回のセミナーは「旗の謎を追う」という趣旨ではあったが、その謎を追いつつ大阪の労働運動の歴史を見ていくと、今に繋がる流れがあるということが少しずつ見えてきたというのが、今日の話の結論である。

歴史の研究は調べた結果判明したことを述べるのが常道であるが、今回は「判然としない、わからないこと」について、紆余曲折の調査と思考の過程を披瀝した。歴史の迷路を共にさまよいつつ、そこから何かをくみ取っていただければ望外の喜びである。

(8) 付記：三色の解釈

筆者が「この旗についてなにか思い当たることがある方、ご存じの方はぜひ教えてください」とセミナーの終わりに語ったところ、聴講者の一人からこのような意見が出された。「黒は抑圧、赤は闘争、青は平和を表し、上から順に時間の経過を示しているのではないかと」。確かにそう考えれば説明がつく。暗い抑圧の時代の次に闘争の時代が来て、最後に労働者が解放された明るい青空が広がる。そう解釈すれば、下にいくほど色幅が広がっているのも説明がつく。思わず膝を打ったものの、断定できるだけの証拠が見つからない。

さらにその後、「戦前期日本映画労働運動史序説 — 中間階級者の一断面 —」（仮題）（2016

『オリンピックの歴史』河合勇著 白水社 1963.7

年2月5日現在未公開。筆者も未読)の著者である中村正明氏に助言を乞うたところ、旗の真ん中にフィルムが描かれていることに触れて、

「これだけでも無粋なプロレタリアではないなというか、映画という当時としては先進的な産業に従事する人々のモダンさやハイカラさが浮かび上がります。映画産業の従業員が労働者といえども『中間階級』に位置づけられたことは、あながち不思議でないような気がいたします」(筆者へのメール、2016.2.2受信)

と述べられている。

また、中村氏の助言により、日本最初の労働組合である友愛会の徽章および旗のデザインについて『総同盟五十年史』第1巻(総同盟五十年史刊行委員会、1964年)を紐解いたところ、以下のような記述が見つかった。

「[友愛会の]会旗の意匠は鈴木[文治]によって考案されたもので、(中略)中央の火は、すなわち純潔、至誠、熱烈、盛大の記号であるとともに、世を照らす光明という意味です。なお、これを西洋風の炬火とせず、とくにかがり火にしましたのは、われわれは日本国民であるから、日本の国粹をとるという意味であります」(p77)

この当時、炬火(きょか。たいまつ)を労働組合の意匠として扱うのはごく普通感覚であったのだろう。友愛会の炬火が日本風のかがり火であるのに対して、総連盟の炬火は西洋風のものである。やはり八木信一の好みなのだろうか。

三色旗をめぐる謎解きはまだまだ終わらないのである。